

第41回国際日本文学研究集会会議録

PROCEEDINGS OF THE 41st INTERNATIONAL
CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE

Tokyo, 11th ~ 12th Nov. 2017

人間文化研究機構
国文学研究資料館

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE
NATIONAL INSTITUTES FOR THE HUMANITIES

目次

研究発表

- 萩原朔太郎の〈センチメンタリズム〉における身体の意味を考える
カッポンチェツリルカ
CAPPONCELLI Luca001
- 中上健次「浄徳寺ツアー」における〈語り〉の試み 松本 海019
——〈語り物〉文芸の受容と、老婆の〈語り〉——
マツモト カイ
- トランスカルチュラルなテキスト： ROEMER Maria027
阿部和重の初期作品における「エクリチュール」をめぐって
ロ エ マ ー マ リ ア
- 戦時下の小説にみる〈歌〉の役割 廖 秀娟039
——<12月8日小説群>を中心に——
リョウシュウケン
- 貸本屋大物の改装表紙から見る文化・文政・天保期間の合巻の仕入れ
McGEE Dylan068
(63)
ミ キ ー デイラン
- 並木正三の作品における人物造形 陳 夢陽080
(51)
チン ムヨウ
- UCLA 梅尾コレクションの研究 幾浦 裕之092
寛城院旧蔵書の視点から (39)
イクウラ ヒロユキ
- 林宗和聞書抄『大学抄』の生成とその価値 張 硯君114
——講述聞書における校合の実態をめぐって—— (17)
チョウ ケンケン
- 古代日本における地理書 MANIERI Antonio130
『和名類聚抄』所引『宜都山川記』をめぐって (01)
マ ニ エ ー リ ア ン ト ニ オ

対 談

多和田 葉子 × ロバート キャンベル

「蛸、出て来い。」ついそちらへ歩いて行ってしまう人々の物語 133

ディスカッサント： 河野 至恩

ショートセッション要旨 159

ポスターセッション題目 162

* * * * *

総括

イタサカ ノリコ
板坂 則子 163

英文要旨 169

執筆者紹介 183

プログラム 187

国際連携委員会委員名簿 189

特にどの類書から影響を受けているか明らかにすることによって、平安時代において知識がどのように伝達され、教養の層が形成されていったのか解明することにつながる、と本研究の可能性を示唆した。

ロバート・キャンベル氏は、本発表の平安文学研究における意義について質問した。発表者は、平安時代には中国文学から様々な影響を受けているとはいっても、直接漢籍に当たることは少なく、日本人が書いた書物から間接的に知識を得ることが多かったことが確かめられた、と回答した。キャンベル氏は、近世文学においても同様の手法による研究はよく行われているため、長いスパンのなかでこれらの研究の意義を考える手がかりを得た、と述べた。

馬淵和夫『十卷本系諸本の影印対照』(勉誠出版、二〇〇八年八月)。

東京大学国語研究室編『倭名類聚抄天文本』(汲古書院、一九八七年一月)。

京都大学文学部国語学国文学研究所編『諸本集成倭名類聚抄』(臨川書店、一九六八年七月)。

(2) 藏中進「序にかえて」(藏中進・林忠鵬・川口憲治『倭名類聚抄』十卷本・廿卷本所引書名 索引、勉誠出版、一九九九年五月) 二頁。

(3) 林忠鵬『和名類聚抄の文献学的研究』(勉誠出版、二〇〇二年四月)。

尹仙花『和名類聚抄』所引「呉時外国志」について、『外国語学会誌』第四十号、二〇一一年三月。

尹仙花『和名類聚抄』における『法苑珠林』の間接引用について、『南州異物志』南越志を中心に、『東アジア比較文化研究』第十号、二〇一二年六月。

尹仙花『和名類聚抄』における『法苑珠林』の間接引用について、『広志』を中心に、『水門』第二三号、二〇一二年七月勉誠出版。

(4) 拙稿『和名類聚抄』「牛馬毛」門の本文、『外国語学研究』第十三号、二〇一二年三月。

(5) 林忠鵬『和名類聚抄の文献学的研究』(勉誠出版、二〇〇二年四月) 六三六頁。

(6) 汪紹楹校『芸文類聚』(上海古籍出版社、一九八二年)。

『初学記』(中華書局、一九六二年)。

『太平御覽』(中華書局、一九六〇年)。

『楽府詩集』(上海古籍出版社、一九九八年)。

中田祝夫編『元和三年古活字版廿卷本倭名類聚抄』(勉誠出版、一九七八年三月)。

京都大学文学部国語学国文学研究所編『諸本集成倭名類聚抄』(臨川書店、一九六八年七月)。

(7) 『晋書』(中華書局、一九七四年十一月)。

(8) 同右。

(9) 『新唐書』(中華書局、一九七四年十一月)。

(10) 同右。

【附記】 本稿の完成にあたり、こゝ指導を賜りました藏中しのお先生に、ここに厚く御礼申しあげます。

* 討論要旨

小野泰史氏は、『和名類聚抄』が『初学記』と『芸文類聚』以外の類書も参照している可能性がある、と指摘した。発表者は、『和名類聚抄』には従来『法苑珠林』などからの間接引用も指摘されているが、最も影響を与えた類書は『初学記』と『芸文類聚』の二書である、と回答した。小野氏は、特に『白氏六帖』は『和名類聚抄』の序文にも書名が挙がっているため、併せて確認する必要がある、と重ねて指摘した。小野氏の指摘に付け加えて、司会の海野圭介氏は、

おわりに

『和名抄』『牛馬毛』門に一例のみ引用される『宜都記』は、佚書『宜都山川記』のことであった。

そこで、本稿では『宜都山川記』を引用する類書『芸文類聚』『初学記』『太平御覧』、および『楽府詩集』の本文を調査して、そこに引用される『宜都山川記』の佚文を収集した。

これにもとづいて、佚書『宜都山川記』について知り得たことは、次の三点である。

第一に、『宜都山川記』は、晋代・袁山松の撰になる。おそらく、宋代以前に散佚したが、唐代類書『芸文類聚』『初学記』、宋代類書『太平御覧』に引用されて佚文をのこす。日本では、『日本国見在書目録』に著録されず、『和名抄』の引用例二例が確認されるのみである。

第二に、箋注に指摘するように、『和名抄』所引本文は、源順が直接『宜都山川記』を参看して得られたものではなく、唐代類書『芸文類聚』『初学記』に引く袁山松撰『宜都山川記』本文を間接引用、所謂採引きしたものである。

第三に、『宜都山川記』は地理志であり、佚文から知られる本書の内容は、地名や山名、方位による場所等を示し、風土景観や地名にかかわる伝承を記す場合もある。

【注】

(1) 川瀬一馬『古辞書の研究』(大日本雄辯会講談社、一九五五年十一月)。

宮澤俊雅「倭名類聚抄二十卷本語本再考」(松村明先生喜寿記念会編『国語研究』明治書院、一九九三年十月)。

馬淵和夫『廿卷本系語本の影印対照』(勉誠出版、二〇〇八年八月)。

中田祝夫編『元和三年古活字版廿卷本倭名類聚抄』(勉誠出版、一九七八年三月)。

名古屋博物館編『名古屋博物館資料叢書二・和名類聚抄』(名古屋博物館、一九九二年六月)。

「永嘉の乱」は西晋の末永嘉年間（三〇七年～三一二年）に起こった匈奴民族による叛乱で、上限が三〇七年になる。さらに、宋・嘉祐六年（一〇六〇年）に成立した『新唐書』卷五八志四八「藝文」には次の二つの書物が記されている。

李氏宜都山川記一卷

袁山松後漢書一百一卷^①

しかし、ここにも、袁山松の『宜都山川記』は著録されない。また、『新唐書』と同時代、北宋時代に成立した『樂府詩集』には、一部であるが、『宜都山川記』の引用がある。これは、『宜都山川記』そのものではなく、他の類書などの書物からの間接引用である可能性が少なくない。

したがって、宋時代以前に、すでに『宜都山川記』は失われた可能性があるとみてよい。

『宜都山川記』の本文内容の特徴は、大きく四分類することができる。

第一に、「丹山」「宜陽山」「方山」「銀山」「獸牙山」「荊門山」「鍾山」「重山」「下魚城山」のような山名である。

第二に、「神竜」「丹溪」のような河川名である。

第三に、「黄牛灘」に見られる「灘」などの地名である。つまり、『宜都山川記』に収載されるのは、書名の「山川」から類推されるように、山や川の地名、ないしは、それらを包括した土地の自然の景色である。また、用例7「下魚城」のように、これらの地名の由来を記すこともある。そして、これらの地域の特徴的な天候について「雨必降」「冷不絶」「応時天雨」「天陰欲雨」「冬夏常青」などの気候の表現が少なくない。また、その地域に生息する「魚」「牛」「猿」などの動物名も見られる。以上のことから、佚書『宜都山川記』は、中国のさまざまな地域の風土的特徴を収載して、その現状や名称の由来などを解説し、さらに細かい地理志であった。それは唐代の地誌『大唐西域記』や日本の「風土記」にも通じる宜都の周辺地域の地理書であったと推測される。

三、『宜都山川記』の性格

表4 『宜都山川記』 佚文集成によって、本書の性格を考察することとする。

まず、『宜都山川記』撰者・袁山松は、唐・貞観二二年（六四八年）に成立した房玄齡・李延寿らの撰になる『晋書』卷十安帝五年（四〇一年）に没年が記録されている。

夏五月、孫恩寇滬流、吳国内史袁山松死之。⁷⁾

また、『晋書』卷八三に、袁山松の伝記が記されている。

山松少有才名、博学有文章、著後漢書百篇。衿情秀遠、善音樂。旧歌有行路難曲、辞頗疏質、山松好之、乃文其辞句、婉其節制、每因酣醉縱歌之、聽者莫不流涕。初、羊曇善唱樂、桓伊能挽歌、及山松行路難繼之、時人謂之「三絶」。時張湛好於齋前種松柏、而山松每出遊、好令左右作挽歌、人謂「湛屋下陳屍、山松道上行殯」。山松歷顯位、為吳郡太守。孫恩作乱、山松守滬流、城陷被害。⁸⁾

これによって、袁山松の著作に『後漢書』があつたことが知られる。袁山松撰『後漢書』は漢代に関する史書である八家後漢書の一つである。

しかし、『宜都山川記』の書名はここには確認されない。また、宋・嘉祐六年（一〇六〇年）欧陽修らが撰述した歴史書『新唐書』卷五八志四八「藝文」には、『後漢書』が著録されている。

袁山松後漢書一百一卷⁹⁾

しかしながら、これらの『宜都山川記』という書名が全く見られない。次に、『宜都山川記』の成立年代であるが、撰者・袁山松の没年は安帝五年（四〇一年）、『宜都山川記』の成立年代の下限も大幅に早く見積もつて、この年までである。一方、成立年代の上限としては、表3の用例7に「永嘉の乱」の記事が収録されていることに注目したい。

15	14	13	12	11	10	9
□山	宜陽山	□山	鍾山	神竜	獸牙山	荊門
<p>乞則不得。</p> <p>【太】 宜都記曰、□山具有文石穴、平居無水、有渴者至、請乞輒得水、戲逐之入穴、潛行出漢中、漢中人失馬、亦嘗出此穴、相去數里。</p> <p>又曰、自西陵北行三十里、有石穴名馬穴。嘗有白馬出食、人</p>	<p>【太】 宜都記曰、宜陽山有風井、穴大如甕、夏出冬入。有樵人置笠穴口、風吸之、后於長楊溪口得笠、則知潛通也。</p>	<p>【太】 宜都記曰、□山、山谷之內有石穴、穴出清泉、水有神魚、大者二尺、小者一尺、釣者先請多少、扞而請之、數滿便止。水側有異花、欲摘如魚請。又有異木、名千歲、叶似棗、冬夏常青。復有蒼範溪相近。</p>	<p>【太】 袁山松宜都記曰、鍾山。山根有涌泉成溪、溪注丹水、天陰欲雨、輒有赤氣、故名丹溪。</p>	<p>【太】 宜都山川記曰、鄉下村有澗、澗有神竜、每旱、百姓輒以□草投澗上流、魚死竜怒、応時天雨。</p>	<p>【初】 宜都山川記曰、獸牙山有石壁、其文黃赤色、有牙齒形。</p> <p>【太】 袁山松宜都山川記曰、虎牙山有石壁、其文黃赤色、形如齒形。</p>	<p>【太】 袁山松宜都山川記曰、南崖有山名荊門、北對崖有山名虎牙、二山相對、其荊門山在南、上合而下空徹、山南有像門也。</p>

8	7	6	5
銀山	下魚城	西陵南岸	三峽
<p>【初】袁山松宜都山川記曰、銀山具有溫泉、注大溪。夏才暖、冬則大熱、上常有霧氣。百病久疾、入此水多愈。</p> <p>【和】宜都山川記云、佷山具有溫泉。百病久病、入此水多愈矣。</p>	<p>【初】袁山松宜都記曰、狼山東六十里有山、名下魚城、四面絕崖、唯兩道可上、皆險峻。山上周回可二十里、有林木池水、人田種於山上。昔永嘉亂、土人登此避賊。守之、經年、食盡、取池魚擲下與賊、以示不窮。賊遂退散、因此名為下魚城。</p> <p>【太】袁山松宜都記曰、狼山東六十里有山、名下魚城、四面絕崖、惟兩道可上、皆峻險。山上周回可二十里、有林池水、民田種於山上。昔永嘉亂、土人登此避賊。賊守之、經年、食盡、取池魚擲下與之、示不窮。賊遂退散、因名此為下魚城。</p>	<p>五色石。</p> <p>又曰、大江清濁分流、其水十丈見底、視魚遊如乘空、淺処多</p> <p>【初】袁山松宜都記曰、對西陵南岸有山、其峰孤秀。人自山南上至頂、府臨大江如縈帶、視舟船如鳧雁。</p> <p>【太】袁山松宜都記曰、對西陵南岸有山、其峰孤秀、人自山南上至頂、俯臨大江如縈帶、視舟船如鳧雁。</p>	<p>【芸】宜都山川記曰。諸山谷傳其響。泠泠不絕。</p> <p>【太】袁山松宜都記曰、楚之世有三峽、高山重□、非日中半夜、不見日月、猿鳴至清。諸山谷傳其響。泠泠不絕也。</p> <p>【樂】山谷傳響。泠泠不絕、行者聞之、莫不懷土。</p> <p>猿鳴至清。</p> <p>峽中</p>

	1	2	3	4
項目	峽口	丹山	丹山	黃牛灘
本文	<p>【芸】袁山松宜都記曰。自西陵泝江西北行三十里。入峽口。其山行周迴隱映。如絕復通。高山重嶂。非日中夜半。不見日月也。</p>	<p>【芸】袁山松宜都記曰。郡西北陸行四十里。有丹山。山間時有赤氣。箬蓋林嶺如丹色。因以名山。</p> <p>又曰。自西陵東北陸行百二十里。有方山。其嶺四方。素崖如壁。天清朗時。有黃影似人像。山上有神祠場。特生一竹。茂好。其標垂場中。場中有塵埃。則風起動此竹。拂去如洒掃者。</p> <p>【太】宜都記曰。丹山。時有赤氣。箬蓋如丹。故有此名。</p>	<p>【芸】袁山松宜都山川記曰。郡西北。有丹山。天晴、嶺忽有霧起。迴轉如煙。不過再朝、雨必降。</p> <p>【初】宜都山川記曰。郡西北、陸行三十里、有丹口。天晴、出嶺忽有霧起。迴轉如煙。不過再朝、雨必降。</p> <p>【太】宜都山川記曰。郡西北。三十里。有丹山。天晴、山嶺忽有霧起。迴轉如煙。不過再朝、雨必降。</p>	<p>【芸】袁山松宜都山川記曰。自峽口泝江百許里。至黃牛灘。南岸有重山。山頂有石壁。上有人負刀牽黃牛。人跡所絕。莫得究焉。</p> <p>【樂】宜都山川記曰。自東入西陵界。至峽口一百許里、山水紆曲、林木高茂。</p> <p>【和】宜都記云、黃牛灘</p> <p>有人牽黃牛</p> <p>【箋】藝文類聚引云、自峽口泝江百許里、至黃牛灘、南岸有重山、山頂有石壁。上有人負刀牽黃牛。人跡所絕。莫得究焉。</p>

北宋・郭茂倩撰『樂府詩集』…二例。

『宜都山川記』の引用箇所は、以上の十五例である。九箇所は、諸書に伝わっている。一箇所は、『芸文類聚』からのみ、五箇所は『太平御覽』からのみ引用されている。

『宜都山川記』を引用する三つの漢籍は、類書に分類される。類書ではない北宋の樂府の総集『樂府詩集』には、『宜都山川記』が二箇所のみ引用されているが、これらの二箇所は、付表の4「黄牛灘」と5「三峡」に見られるように、先行する類書『芸文類聚』『太平御覽』にも確認され、これらの類書からの引用された可能性が低くない。前述の通り、掖齋が指摘されたように、『和名抄』の引用も類書からの孫引きである。

*表4 『宜都山川記』佚文集成

略称

【芸】…『芸文類聚』

【初】…『初学記』

【太】…『太平御覽』

【樂】…『樂府詩集』

【和】…『和名類聚抄』元和古活字本

【箋】…『箋注和名類聚抄』

出典注記『宜都山川記』を『和名抄』諸本は「冥」に誤るが、箋注は正しく『宜都山川記』とし、『初学記』を引く。この部分が『宜都山川記』の佚文であることに椽斎は気づいていた。

狩谷椽斎箋注が指摘したように、『和名抄』に引く『宜都山川記』と『宜都記』は同じ書であり、撰者は袁山松である。また、『和名抄』に引く『宜都山川記』は、源順が本文を直接参看して引用したのではなく、類書『芸文類聚』『初学記』等からの間接引用、所謂孫引きであるとみてよい。

二、『宜都山川記』佚文集成

『宜都山川記』『宜都記』なる書は現在伝わっておらず、夙く散佚したものとされる。そこで、佚書と見られる『宜都山川記』について諸書に散らばる佚文を収集し、佚文集成を試みたものが、表4の『宜都山川記』佚文集成である。『宜都山川記』は、『和名抄』に二例しか引用されていない。しかし、椽斎箋注は『初学記』『太平御覧』に「袁山松『宜都山川記』」、「新唐書」に「李氏『宜都山川記』一卷」と書名をあげて指摘した。

『宜都山川記』を引用する典籍は少なく、『日本国見在書目録』にも書名を確認することができない。管見の範囲では、漢籍に四例、和書に二例を確認することができた。

また、『和名抄』の用例は『和名抄』に影響を与えたとされる類書『初学記』『芸文類聚』『太平御覧』にも認められる。付表に見られるように、『宜都山川記』を引用する典籍と引用箇所は、次の通りである。⁶⁾

唐・武徳七年（六二四年） 歐陽詢等撰『芸文類聚』…五例。

唐・開元十六年（七二八年） 徐堅等撰『初学記』…五例。

宋・太平興国二年（九七七年）…八年（九八三年） 頃李昉等奉勅撰『太平御覧』…十二例。

*表3 「水部」における「温泉」の本文異同

『初学記』	十卷本				廿卷本		
	箋注和名類聚抄	天文本	前田本	真福本	元和活字本	天正本	伊勢廿卷本
<p>袁山松宜都山川記曰、銀山県有温泉、注大溪。夏才暖、冬則大熱、上常有霧氣。百病久疾、入此水多愈。</p>	<p>温泉 百病久病、入此水多愈矣。 宜都山川記云、佷山縣有温泉。一云湯泉、和名由。</p>	<p>温泉 百病久疾、入此水多愈矣。 冥都山川記云、佷山縣有温泉。一云湯泉、和名由。</p>	<p>温泉 百病久疾、入此水多愈矣。 冥都山川記云、佷山縣有温泉。一云湯泉、和名由。</p>	<p>温泉 百病久疾、入此水多愈矣。 冥都山川記云、佷山縣有温泉。一云湯泉、和名由。</p>	<p>温泉 百病久病、入此水多愈矣。 冥都山川記云、佷山縣有温泉。一云湯泉、和名由。</p>	<p>温泉 百病久病、入此水多愈矣。 冥都山川記云、佷山縣有温泉。一云湯泉、和名由。</p>	<p>温泉 百病久病、入此水多愈矣。 冥都山川記云、佷山縣有温泉。一云湯泉、和名由。</p>

表2から、掖斎が引用した『芸文類聚』本文と『芸文類聚』現行本本文は一致する。『和名抄』「牛馬毛」門に引く『宜都記』は、類書『藝文類聚』からの引用である可能性が想定される。しかし、『芸文類聚』は、引用書目が『宜都記』ではなく、『宜都山川記』に作る。『宜都記』は、『宜都山川記』の略称である可能性がある。

一方、『和名抄』巻一水部「温泉」条には、『宜都山川記』なる書物が引用されている。箋注は『宜都山川記』について、次のように述べている。

初學記、太平御覽、並云、袁山松宜都山川記、今無傳本。新唐書有李氏宜都山川記一卷、未知是否。
（『初學記』『太平御覽』、並に云ふ、袁山松の『宜都山川記』と。今、伝本無し。『新唐書』に李氏の『宜都山川記』一卷有るも、未だ是か否かを知らず。）

この箋注を踏まえて、林忠鵬氏は『宜都山川記』について次のように指摘された。

『宜都山川記』、『宜都記』・『唐書』に「李氏宜都山川記一卷」と、『太平御覽』に「袁山松宜都山川記」という記事がある。『和名抄』はおそらく類書からの孫引きであろう。⁽⁵⁾

『宜都山川記』という書名は、『新唐書』卷五八志四八「藝文」に、

李氏宜都山川記一卷

『太平御覽』に次のように載録される。

袁山松宜都山川記

さらに、『初學記』には、次の『宜都山川記』本文が確認された。

袁山松宜都山川記曰、銀山県有温泉、注大溪。夏才暖、冬則大熱、上常有霧氣。百病久疾、入此水多愈。

『宜都山川記』の本文を対照して示すと、表3のようになる。

『芸文類聚』が『宜都記』を引用していることを指摘している。

芸文類聚引云、自峽口泝江百許里、至黄牛灘。南岸有重山、山頂有石壁、上有人負刀牽黄牛。人迹所絶、莫得究焉。此所引纂節、頗失当。

〔『芸文類聚』に引きて云ふ、峽口より江を泝ること百里許り、黄牛の灘に至る。南岸に重山有り、山頂に石壁有り、上に人刀を負ひて黄牛を牽く有り。人迹絶ゆる所、究むるを得ること莫し。此れ引くところの纂節、頗る当を失す。〕

この引用について、椋斎は「此れ引くところの纂節は頗る当を失す」と指摘した。つまり、椋斎は、『芸文類聚』によって『宜都記』の佚文を参看し、『宜都記』に引く「黄牛灘」が地名にすぎず、「黄牛」、和名「阿米（女）字之」の説明としては的を得ていないことを述べている。

『芸文類聚』『和名抄』箋注の引く『宜都記』本文を対照して示すと、表2のようになる。

*表2 『芸文類聚』『和名抄』『箋注和名類聚抄』の比較

『芸文類聚』	袁山松宜都山川記曰、自峽口泝江百許里、至黄牛灘、南岸有重山、山頂有石壁、上有人負刀牽黄牛、人迹所絶莫得究焉。
『和名抄』	宜 都記云、 有人 牽黄牛 黄牛灘
『箋注和名類聚抄』	山頂有石壁、上有人負刀牽黄牛、人迹所絶莫得究焉。此所引纂節頗失当。 自峽口泝江百許里、至黄牛灘、南岸有重山、

*表1 「牛馬毛」門における「黄牛」の本文異同

十卷本	廿卷本
伊勢十卷本	伊勢廿卷本
前田本	天正本
天文本	元和活字本
箋注和名類聚抄	名古屋博物館本
黄牛宜都記云、黄牛難有人牽黄牛、辨色立成云、阿米宇之	アメウシ
黄牛宜都記云、黄牛難有人牽黄牛、辨色立成云、阿米宇之	黄牛
黄牛宜都記云、黄牛難有人牽黄牛、辨色立成云、阿米宇之	黄牛宜都記云、黄牛難有人牽黄牛、辨色立成云、阿米宇之
黄牛宜都記云、黄牛難有人牽黄牛、辨色立成云、阿米宇之	黄牛宜都記云、黄牛難有人牽黄牛、辨色立成云、阿米宇之

表1から知られるように、「黄牛」条の本文異同は、和名を万葉仮名で記す「米」「女」のみであり、『宜都記』本文には諸本に異同がない。

黄牛灘、有人牽黄牛。

(黄牛の灘、人有りて、黄牛を牽く。)

文政十年(一八二七年)に成立した狩谷棧斎の『和名抄』の注釈書である『箋注倭名類聚鈔』の「黄牛」条について、

る類書、韻書の類などからの引用（いわゆる孫引き）も当然考えられるところで、すでに例えば切韻関係の多くは菅原是善撰『東宮切韻』によるものであることが指摘されてもいる。（中略）『和名抄』の選者は実際にこれらを手にしてことから引用したものではなく、おそらく『芸文類聚』³ごとき先行類書からの引用（孫引き）と考えてよいものであろう。²

『和名抄』には引用例が一例しかない出典も数多く見られ、その多くは佚書であり、源順が直接本文を参看したのではなく、類書からの間接引用であることが多い。これについては、林忠鵬氏、尹仙花氏の研究がある。³

『和名抄』の中に、引用例が一例のみの書目『宜都記』が存在する。しかし、『宜都記』は、寛平三年（八九一年）ごろに藤原佐世によって作られた漢籍の分類目録『日本国見在書目録』に著録されず、日本に招来されていたかどうかは定かではない。『和名抄』に一例のみ引用され、日本への伝来が確証できない佚書『宜都記』についても、類書からの間接引用の可能性が想定される。本稿は、『和名抄』諸本と類書の本文とを比較して、諸書に散らばる『宜都記』の佚文を収集し、その本文を検討することによって、『和名抄』に引く『宜都記』の性格をあきらかにすることを目的とする。

一、『和名抄』所引佚書『宜都記』『宜都山川記』

『和名抄』に引く『宜都記』の唯一例は甘巻本系では巻十一「牛馬部」第一四九「牛馬毛」、十巻本系では巻七「牛馬部」第一〇五「牛馬毛」の「黄牛」条であり、その和名は『弁色立成』を引いて「阿米（女）宇之」と記される。⁴

表1は、『宜都記』を引く『和名抄』「黄牛」条の諸本の本文を対照して示したものである。

古代日本における地理書

『和名類聚抄』所引『宜都山川記』をめぐって

マニエリ
MANIERI Antonio

はじめに

日本における地理書の問題は、「風土記」等の日本で編纂された地理書を直接検討することの他に、そうした地理書編纂に影響を与えたと思われる、中国からの招来典籍の研究が必要である。本稿では、『和名類聚抄』が引用した『宜都山川記』に関する考察を行う。

平安中期の文人・学者である源順の撰になる『和名類聚抄』（以下『和名抄』と略称）は、日本最初の分類体の漢和辞書であり、平安時代承平年間（九三一年～九三八年）に醍醐天皇皇女勤子内親王の命によって編纂された。掲出語（漢語）の語義を漢文で注し、和訓を万葉仮名で加え、漢籍・和書を博搜して考証・注釈を加える。『和名抄』には廿卷本系と十卷本系の二つの系統があり、廿卷本系に三二部二四九門、十卷本系に二四部一二八門がある。⁽¹⁾

『和名抄』における先行する類書、韻書の類などからの間接引用、所謂孫引きに関して、藏中進氏は次のように述べられた。

『和名抄』に引用されている書名を通看すると、漢籍については、經史子集の全般に涉って主要な顔ぶれが見られ、更に内典、雑家、俗書の類までも含まれていて、その上にかんりの和書も数えることができる。当時二一歳すぎであった撰者の読書範囲の広いのに一驚せざるを得ないであろう。尤もこれらの書中には、先行す

(1)

執筆者紹介

多和田 葉子 (タワダ ヨウコ)

早稲田大学文学部卒。1982年、ドイツ・ハンブルクへ。ハンブルク大学大学院修士課程修了。チューリッヒ大学大学院博士課程修了。1991年「かかとを失くして」で群像新人賞、1993年「犬婚入り」で芥川賞、2000年『ヒナギクのお茶の場合』で泉鏡花賞、2002年『球形時間』でドゥマゴ文学賞、2003年『容疑者の夜行列車』で谷崎潤一郎賞、伊藤整文学賞、2011年『尼僧とキューピッドの弓』で紫式部文学賞、『雪の練習生』で野間文芸賞、2013年『雲をつかむ話』で読売文学賞と芸術選奨文部科学大臣賞(文学部門)を受賞。近著に『献灯使』などがある。日独二ヶ国語で作品を発表しており、1996年にドイツ語での作家活動によりシャミッソー文学賞、2016年にはドイツで最も権威のある文学賞のひとつクライスト賞を受賞。2006年よりベルリン在住。

Robert CAMPBELL (ロバート キャンベル)

国文学研究資料館長

近世・近代日本文学が専門で、とくに19世紀(江戸後期～明治前半)の漢文学と、漢文学と関連の深い文芸ジャンル、芸術、メディア、思想などに関心を寄せている。テレビでMCやニュース・コメンテーター等をつとめる一方、新聞雑誌連載、書評、ラジオ番組企画・出演など、さまざまなメディアで活躍中。

ニューヨーク市生まれ。カリフォルニア大学パークレー校卒業(B.A. 1981年)。ハーバード大学大学院東アジア言語文化学科博士課程修了、文学博士(M.A. 1984, Ph.D. 1992年)。

1985年に九州大学文学部研究生として来日。同学部専任講師(1987年、国語国文学研究室)、国立・国文学研究資料館助教授(1995年)を経て、2000年に東京大学大学院総合文化研究科助教授に就任(比較文学比較文化コース〔大学院〕、学際日本文化論〔教養学部後期課程〕、国文・漢文学部会(同学部前期課程)担当)。2007年から同研究科教授。2017年4月から現職。

主な編著に、『ロバート キャンベルの小説家神髄 — 現代作家6人との対話 —』(NHK出版)、『読むことの力 — 東大駒場連続講義』(講談社)、『海外見聞集』(岩波書店)、『漢文小説集』(岩波書店)、『江戸の声 — 黒木文庫でみる音楽と演劇の世界 —』(駒場美術博物館)、『Jブンガク — 英語で出会い、日本語を味わう名作50 —』(東京大学出版会)、「電子版黒木文庫」などがある。

河野 至恩 (コウノ シオン)

上智大学国際教養学部准教授

プリンストン大学大学院比較文学部博士課程修了。上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・国際教養学部准教授。専門は比較文学・日本近代文学。

編著に『日本文学の翻訳と流通 近代世界のネットワークへ』（村井則子と共同編集。勉誠出版、2018年）。単著に『世界の読者に伝えるということ』（講談社現代新書、2014年）。主な論文に「一九一〇年代における英語圏の日本近代文学—光井・シンクレア訳『其面影』をめぐって」（河野・村井編『日本文学の翻訳と流通 近代世界のネットワークへ』勉誠出版、2018年）、「Mori Ōgai and the 'Literature of the World'. Reading *Hyaku monogatari* through the Eyes of the Foreign Reader” (Klaus Kracht (ed.), “*Ōgai*” — *Mori Rintarō. Begegnungen mit dem japanischen homme de lettres* (Harrassowitz, 2014)), “The Rhetoric of Annotation in Mori Ōgai’s Historical Fiction and *Shiden* Biographies” (*Journal of Japanese Studies*, 32:2, 2006)など。主な訳書に、Hiroki Azuma, *Otaku: Japan’s Database Animals* (Jonathan E. Abelと共訳。University of Minnesota Press, 2009)、アルバート・ウェント『自由の樹のオオコウモリ』（日本経済新聞社、2006年）。最近の関心領域は日本文学の翻訳史、翻訳理論、世界文学としての日本文学など。

CAPPONCELLI Luca (カッポンチェッリ ルカ)

イタリア国立カターニア大学 日本語・日本文学講師

ナポリ・オリエンターレ大学を卒業し、國學院大學で修士及び博士（文学）の学位を取得。現在、イタリア国立カターニア大学で日本語及び日本文学の講師として勤めている。研究範囲は与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎を中心とする日本近代詩である。近年は、日本近代詩における身体表現と近代化に伴うボディ・ポリティックスとの関連を探る研究を行っている。与謝野晶子の『みだれ髪』伊訳と解説『*Yosano Akiko. Midaregami*』（Aracne Editrice, 2017年10月）、『日本近代詩の発展過程の研究』（翰林書房、2018年2月）等、イタリアと日本で多数の学術論文や書籍を発表している。

松本 海 (マツモト カイ)

早稲田大学文学部文学研究科博士後期課程

早稲田大学文学部卒業、現在早稲田大学文学部文学研究科博士後期課程三年。中上健次作品に現われる「老婆」について研究。

○論文

- ・「中上健次・短篇小説「天鼓」における古典受容：雑誌『風景』での掲載をふまえて」（『牛王』10号、2016年）
- ・「初期中上健次の文学的基盤の確立——『文藝首都』を中心に——」（『繡』第25号、2012年）

ROEMER Maria (ロエマー マリア)

ハイデルベルグ大学・クラスター・オブ・エクセレンス『グローバルな分脈におけるアジアとヨーロッパ』・博士後期課程3年

2003-2004年、ベルリン自由大学修士課程の時、早稲田大学文学部・大学院に留学

する。2009年修士号（比較文学・日本学）を取得してから当大学のクラスター・オブ・エクセレンス『感情の多様な言語』で博士課程に進む。2013-2014年、コーネル大学に留学する。2014年以来ハイデルベルグ大学・クラスター・オブ・エクセレンス『グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ』の博士課程に在籍（修了予定2018年12月）。研究分野は比較文学、比較文化、多文化（トランスカルチュラル）・グローバルイゼーション。

主な論文：「Precarious Attraction: Abe Kazushige's Individual Projection Post-Aum」Kristina Iwata-Weickgenannt・Roman Rosenbaum編『Visions of Precarity in Japanese Popular Culture』Routledge、2015年、86-101頁。

MANIERI Antonio (マニエーリ アントニオ)

イタリア国立ナポリ東洋大学・研究員

日本言語文化学博士（大東文化大学、2012年）。文献学・古辞書学・奈良文学・和漢比較文学。

主な論文に「『和名類聚抄』『牛馬毛』門と奈良朝の下級官人層—『漢語抄』『楊氏漢語抄』『辨色立成』をめぐって」（『東アジア比較文化研究』第11号、2012年）、『Hitachi no kuni fudoki. Cronaca della provincia di Hitachi e dei suoi costumi』（『常陸国風土記』イタリア語訳、2013年）、「『本朝文粹』における異論」（伊文、マリア・キアラ・ミリオーレ、アントニオ・マニエーリ、ステファノ・ロマニョーリ編『日本における異論文学』、2016年）、「イタリアにおける記紀の翻訳とその受容」（『万葉古代学研究年報』第15号、2017年）などがある。

張 硯君 (チョウ ケンクン)

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程三年

中国大連外国語大学日本語学科卒業。日本政府奨学金研究留学生として日本に留学し、大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程に在学中。日本古典文学専攻。現在は、抄物を中心として中世における漢文学・学問の研究に取り組んでいる。

論文に「白楽天殊化身説の生成と展開」（『白居易研究年報』第十七号、2016年12月）、「三条西実隆の知的関心—経学関係の漢籍を中心に—」（『問谷論集』第十一号、2017年6月）などがある。

幾浦 裕之 (イクウラ ヒロユキ)

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程

2017年4月～6月、2018年1月～3月UCLA the Department of Asian Languages & Culturesへ、Visiting Graduate Researcherとして留学。専門は中世和歌文学、日本書誌学。御子左家の女房歌人を中心に、和歌、散文作品を書誌学、ジェンダーの視点から研究。主要論文は、田淵句美子・中世和歌の会共著『民部卿典侍集・土御門院女房全釈』（風間書房2016年）、「栞型本『阿仏の文』（広本）解題・翻刻」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』25号-1 2017年9月）。

陳 夢陽 (チン ムヨウ)

早稲田大学大学院文学研究科 演劇映像学コース博士課程

南京林業大学出身。北京外国語大学日本学研究中心修士課程修了後、国費外国人留学生として来日。現在、早稲田大学大学院文学研究科、演劇映像学コース博士課程在学中。研究分野は並木正三を代表劇作家とする18世紀後半の歌舞伎である。

MCGEE Dylan (ミギー デイラン)

名古屋大学人文学研究科准教授

研究分野は近世日本文学・出版文化・比較文学。単著論文に「名古屋戯作と貸本屋大惣」(PAJLS) 25号、2017年10月)、「樹芽田楽の洒落本から見るお酒と酔い」(『酔いと文化』勉誠出版、2017年)、「平出順益の『代睡漫抄』から窺える抜粋抄録と大惣本の貸出」(『言語文化論集』第37巻1号、2015年10月)などがある。

廖 秀娟 (リョウ シュウケン)

台湾・元智大学応用外国語学科 准教授

1997年交流協会奨学生として大阪大学に留学。2003年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士号取得。研究分野は昭和十年代文学、日本統治期台湾文学。主な論文：

「太宰治「作家の手帖」論—〈とんちんかん〉を狙う語り—」『語文』106・107号、2017

「歌われた理想的な銃後の女性像—〈軍歌〉を媒介として—」『東アジアにおけるトランスナショナルな文化の伝播・交流—メディアを中心に』日本學研究叢書22号、台湾大学出版、2016

「太宰治「東京だより」論—作品のアイロニー性から—」『解釈』61巻7.8月号、2015

第41回国際日本文学研究集会プログラム

平成29年11月11日(土)

開会挨拶

ロバート キャンベル (国文学研究資料館長)

第1セッション

▼研究発表

- ①朔太郎のセンチメンタリズムにおける「身体」の意味を考える
CAPPONCELLI Luca (イタリア国立カタニア大学講師)
- ②中上健次「浄徳寺ツアー」における〈語り〉の試み
松本 海 (早稲田大学大学院博士課程)
- ③多文化的なテキスト:
阿部和重の初期作品における「エクリチュール」をめぐって
ROEMER Maria (ハイデルベルグ大学博士課程)

【対談】

多和田 葉子 × ロバート キャンベル

「蛸、出て来い。」ついそちらへ歩いて行ってしまう人々の物語

ディスカッサント 河野 至恩 (上智大学准教授)

ポスターセッション (11月11日～12日)

●大地としての生命力

—三島由紀夫古典主義期の作品における「下層への動き」—

藤 夢激 (東京外国語大学博士課程)

●狂歌と彗星 —『古今夷曲集』考

大内 瑞恵 (東洋大学非常勤講師)

●西周著「百学連関」にみる芸術理解について

江崎 公子 (元国立音楽大学准教授)

●法華寺蔵『七草絵巻』考 —孝子譚の側面から—

横山 恵理 (大阪工業大学特任講師)

平成29年11月12日(日)

第2セッション

▼研究発表

- ④古代日本における地理書～『和名類聚抄』所引『直都山川記』をめぐって
MANIERI Antonio (イタリア国立ナポリ東洋大学研究員)
- ⑤林宗和聞書抄『大学抄』の生成とその価値
—講述聞書における校合の実態をめぐって—
張 硯君 (大阪大学大学院博士課程)
- ⑥UCLA 梅尾コレクションの研究 覚城院旧蔵書の視点から
幾浦 裕之 (早稲田大学大学院博士課程)

ショートセッション

- ①男が詠む「待恋」—『百人一首』翻訳論
KÁROLYI Orsolya (同志社女子大学大学院博士課程)
- ②蕉風俳諧における「恋句」の特色
金 美京 (筑波大学大学院博士課程)

第3セッション

▼研究発表

- ⑦並木正三の作品における人物造形
陳 夢陽 (早稲田大学大学院博士課程)
- ⑧貸本屋大惣の改装表紙から見る文化・文政・天保期間の合巻の仕入れ状況
McGEE Dylan (名古屋大学准教授)
- ⑨戦時下の小説にみる〈歌〉の役割 —<12月8日小説群>を中心に—
廖 秀娟 (台湾元智大学准教授)

◆第41回国際日本文学研究集会 参加者数のべ160名(発表者含む)

第41回国際日本文学研究集會會議録

2018年 3月28日発行

編集兼発行者

人間文化研究機構 国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

電話 050-5533-2911

FAX 042-526-8604

URL <http://www.nijl.ac.jp/>

印刷所

有限会社サンプロセス

東京都東大和市新堀1-1435-29

電話 042-561-8810